



スラブ・ユーラシア研究センター
平成29年公開講座

「北東アジアにおける 北海道：危機と機会」

境界地域から考える北東アジア
国際関係を考える

公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)

調査研究部上席研究員・北太平洋地域研究室長(NORPAC)

高田 喜博(TAKADA Yoshihiro)

(公開講座で使用した資料に口頭で説明した部分を加筆し、訂正したものです)

北海道の危機①

- 北海道では、全国より10年早く人口減少局面に入っており、市場の縮小や労働人口の減少が、北海道経済や地方財政に深刻な影響を与えると予測されている。
- 北海道の人口は1997年の570万人をピークに2010年に551万人(19万人減)となった。このまま対策を講じないと2040年には419万人(151万人減)、仮に対策が成功すると460～450万人を維持できる(それでも110～120万人減)。

資料：北海道人口ビジョン～北海道の人口と展望～

北海道の危機②

- 別の推計では2010年に552万人であった北海道の人口は、2030年には98万人減少して464万人となり、それに伴って2030年の道内総生産は17兆8750億円(2005年の対比で2兆4560億円減)となる。
資料:『北海道2030年の未来像～人口減少100万人を超えて～』(日本経済新聞社、2006年)
- 各自治体の財政状態は2005年と比較して2040年には15%悪化して、地方財政の破綻が予測され、その頃の国の財政状態を勘案すると、地方自治の改革が必然。インフラ整備を今のうちにやっておくべき。
資料:北海道経済連合会「人口減少・少子高齢化社会における社会资本整備の必要性」(2010年4月)

北海道の危機③

広域分散社会と人口構造・世帯構造の変化

- 海に囲まれた広大な北海道：可能性を秘めながらも、他との連携が難しく、行政サービスのコストも莫大。また、今後は各種インフラの老朽化も進む。
- 人口構造の変化（2030年は3人に1人が65歳以上となり、道民1人当たり社会保障負担が現在の2倍以上）と世帯構造の変化（核家族→夫婦のみ→1人暮らし）で人口問題はより深刻に！

参考：1980年に単身世帯、母子・父子世帯、夫婦のみ世帯の合計が全世帯の38%であったが、2015年には63.7%に拡大。さらに拡大するだろう。

北海道の危機④

政治の停滞と選挙構造の変化

- 10年以上前から少子高齢化の危機が指摘されながら、現状はなにも変わっていない→経済以上に政治の停滞は深刻だ！
- 若者は少ないので加えて選挙へ行かない。これに対して高齢者は選挙へ行く→選挙構造の変化(シルバー・デモクラシー)。北海道の行方は？
因みに、英國では43歳以下の世代はEU残留を選び、高齢者ほどEU離脱を選んだというデータがある。

参考：寺島実郎「シルバー・デモクラシー～戦後世代の覚悟と責任～」
(岩波新書)

北海道の機会①

危機と機会—ピンチはチャンス

- 世界の変化、あるいは、北東アジアの大きな潮流の中で北海道の生き残りを考える: ①グローバリズムとリージョナリズムの二つの流れ、②人口爆発と気候変動、③反対に日本の周辺地域では高齢化！。
- 北海道の農林水産業、観光業、環境に関する産業などを駆使して、そうした世界共通の課題に挑戦し、その中で北海道への人の流れ(観光)、モノの流れ(貿易)、金の流れ(投資)、情報や技術の流れ(技術移転など)を作る。

北海道の機会②

- 東京に依存しない自立した地域経済を構築する→これまで繰り返されてきた「**北海道独立論**」！
- 北欧諸国のように、寒冷地でも小さくてもきらりと光る文化と社会を創造する→「**北方圏構想**」！
- 北海道を取り巻く周辺地域、特に北東アジアの各地域と、共通の課題（環境・食料・高齢化・観光など）について地域レベルで連携して、共に持続的な地域の発展を考える→**国境を越えた地域連携**！
- 北米やEUと人口・GDP・貿易額などを比較しても、北東アジアの潜在力や成長可能性は高い！

北海道の機会③

- 北東アジアの危機(冷戦時代の残滓)を乗り越え、新しい国際関係の枠組みを構築するための拠点を北海道が提供する。
- 一带一路構想と北東アジアのネットワークを繋ぎ、さらに北極海航路をも取り込んだこの地域のグランドデザインを描き、その中に北海道を位置づける。
- 新しい日ロ関係の構築: 対ロシア経済協力8項目、北方4島における「共同経済活動」など。

→ただし「共同経済活動」の実現は非常に困難(先ずは交渉の場を設定することに意味がある)。

参考：日本の食料自給率

- 日本の食料自給率40%以下(カロリーベース)という深刻な事態→問題は気候変動による地球規模の食料危機が発生した場合の食料安全保障。
- 日本の食料安保を考えると、10年以内に50%、できれば70%(英國程度)にすべきだとされている。
- その際に、食料自給率208%の北海道の役割は大きい(因みに秋田190%、山形141%、青森123%で東京と大阪は1%、神奈川2%) 資料：農林水産省「都道府県食料自給率の推移」。

北海道の機会④

- ここで(後半で)取り上げるのは観光、特にボーダーツーリズム(BT)！
- 観光インバウンドの重要性は言うまでもないが、地方経済にとっては国内観光客と観光消費の拡大も当面の課題。
- ボーダー地域の観光を契機に、観光交流の流れを隣接地域と人や情報の流れ、モノの流れ(貿易)、金の流れ(投資)に発展させ、自立的な地域経済を創造する。

観光産業の経済効果①

- 2017年3月に発表された「第6回北海道観光産業経済効果調査」(前回は2012年3月)によると、北海道を訪問した観光客(外国人観光客を含む)の総消費額は1兆4,298億円(前回は1兆2,992億円)で、生産波及効果は2兆897億円(同1兆8,237億円)と推計されている。
- 観光GDPは6,320億円となり道内総生産(名目GDP)18.5兆円の3.4%に相当し、金融・保険業5,883億円、食料品製造業5,877億円、農業5,527億円より規模が大きい。

* 観光は、すでに北海道の基幹産業の一つ！

観光産業の経済効果②

- 観光による雇用誘発者数は189,979人（道内就業者数の8.1%）、収益効果は722億円（道税・市町村税の収益額1.2兆円5.9%）と推計されている。
- 観光による経済波及効果はサービス業、運輸業、小売業、農業、水産業など幅広い分野に及び、地産地消と結びつくと地場産業を活性化させる。
- 人口が減少する地域においては、観光、二地域居住や季節移住などの交流人口の増加によって、地域を活性化させることができる。

* 観光は地方経済にとっても重要な課題！

観光産業の経済効果③

- 観光消費額単価は、道内観光客が12,865円、道外観光客が73,132円、外国人観光客が178,102円と推計されたが、観光客の多くは日本人。
- 観光総消費額1兆4,298億円に対して、道内観光客は6,374億円(44.6%)、道外観光客は4,220億円(29.5%)、外国人観光客は3,705億円(25.9%)消費したと推計(国内観光客の拡大も重要)。
- 縮小が予測される日本人観光客に対して、大きな拡大が期待される外国人観光客は重要だが、現状では、特に地方は日本人観光客を無視することはできない。

観光産業の経済効果④

- 境界地域を含む地方では、外国人観光客の急増にハードもソフトも受入インフラが追いついていない→インバウンドは段階的に拡大させたい。
- これまで外国人との接触が少ない地方では、急増する外国人観光客と一般住民との間に摩擦が発生する場合がある→多文化共生の取組が必要。
- 現在、北海道で推進しているボーダーツーリズムは、まずは日本人観光客の拡大をはかり、それを観光の相互交流(インバウンド)につなげる試みもある(段階的発展を目指している)。

地方観光とボーダーツーリズム

- このように、地方経済にとって観光振興は重要な政策課題で、多くの自治体が取り組んでいるため、地域間競争も激化。しかし、多くの自治体では、他のモノマネ(ゆるキャラやB級グルメなど)から脱却できないで苦戦している。
- これに対してボーダーツーリズムは、この地域にしかないボーダーを地域資源として活用し、他の資源と結びつけ、他地域が真似のできない競争力のある旅行商品を創造する取り組みでもある。
- ボーダー(境界)地域や研究者・専門家や旅行業者のネットワークの活用(後述)。

ボーダーツーリズム(定義)

ボーダーツーリズム(BT)とは！

- 多様な観光の魅力を提供するボーダー(国境・境界)を地域資源として活用し、ボーダー地域にしかない魅力を実感し、学び、楽しむ旅である。
- 国境に接した境界地域を“砦”ではなく“交流拠点”と考えて、境界地域ならではの体験を楽しもうという旅行スタイルであり、境界地域であるということを観光魅力の一つと捉え、境界地域を「見る」「渡る」「比較する」ことで新たな魅力を生み出し、観光客の増加へと結びつけることで境界地域の地域振興を図ることを目的とする。

ボーダーツーリズム(形態)

1. 宗谷とサハリンのようにボーダーを挟んで隣り合う二つの地域を訪ね、その風土・自然・文化・歴史などを比較し、学び、楽しむ旅行形態(他に、北九州・対馬と韓国南部・釜山、八重山と台湾など)。
2. ボーダーは越えないが、昔も今もボーダーである地域を訪ね、交流の足跡や歴史、風土・自然・文化などを探る旅行形態(オホーツク沿岸の旅、小笠原の旅など)。

ボーダーツーリズムの形態 1

中日国境

樺太

満州

稚内・サハリン

朝鮮

対馬・釜山

八重山・台湾

台湾

ボーダーツーリズムの形態 2

稚内市

札幌市

網走市

根室市

根室から稚内までオホーツク沿岸
500km(人口439,000人)をバスで
旅する国境を越えない「オホーツク・
ゲートウェイ」(2015年10月)。

北海道におけるBTの取組事例

- ①2015年6月 稚内・サハリンモニターツアー
- ②同年9月 サハリン国境紀行－北緯50度線へ
- ③同年10月 道東BT:オホーツクゲートウェイ
- ④2016年8月 サハリン北緯50度国境紀行

予定：サハリン北緯50度国境紀行とアレクサンドロフスク・サハリンスキー早周り5日間の旅(8/12～8/16)

構想：北方4島におけるボーダーツーリズム

極東ロシアの人口は630万人
サハリン州の人口は48万人
ユジノサハリンスクは19万人



北海道の人口は544万人
宗谷総合振興局は7万人
稚内市は4.7万人



コルサコフ港

稚内港

ユジノサハリンスク
空港

宗谷岬とクリリオ
ン岬は43km
稚内とコルサコ
フは159km
で航行時間
4時間30分

新千歳とユジノ
サハリンスクは
DHC8-300
で飛行時間
1時間20分

新千歳空港



Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO
Image Landsat

Google



宗谷岬・平和公園

宗谷丘陵・風
力発電施設

宗谷公園(宗谷場所跡)

開基百年記念塔

メガソーラー発電
施設・友好記念碑



宗谷丘陵(北海道遺産)の放牧地と風力発電施設



ソ連軍が上陸した日に真岡郵便局で自決した9人の電話交換手

サハリン州・北海道友好都市交流サミット記念碑





プリゴロドノエにある液化天然ガス工場
(サハリン2の天然ガスがここで液化されタンカーに船積みされる)。



プリゴロドノエ(旧女麗)に建立された日露戦争における日本軍上陸記念碑はソ連時代に倒されたまま放置されている



コルサコフ港では日本統治時代の桟橋が今も使用されている。



コルサコフ市内に立つレーニン像



かつての樺太庁博物館は、現在はサハリン郷土博物館として利用されている。



郷土博物館に野外展示されている日本陸軍の軽戦車(上)と旧樺太司令官邸(今はロシア陸軍が使用)。





ロシア正教会



ドリンスク(旧落合)の王子製紙工場跡

宮沢賢治も訪れたスタロドゥプスコエ（旧栄浜）の海岸では琥珀が拾えるので「琥珀海岸」とも呼ばれる。



宮沢賢治が降り立った旧栄浜駅跡

北緯50度

ポベジノ(旧古屯)

スミルヌイフ(旧氣屯)

ポロナイスク(旧敷香)

マカラフ(旧知取)

ウズモーリエ(旧白浦)

Gulf of Patience

ウズモーリエ(旧白浦)に残る旧白浦神社の鳥居。



ポロナイスク(旧敷香)には、この地で生まれた横綱大鵬の像が立つ。

ポロナイスクの旧王子製紙工場跡



ポロナイスク郊外オタスの杜の「サハリン少数民族戦没者慰靈碑」。





北緯50度線(旧日ソ国境)の森の中に残る国境標石「天第3号」の台座。



サハリン州郷土博物館に展示されている国境標石「天第1号」

「樺太・千島戦没者慰靈碑」。



ソ連軍の「戦勝記念碑」。



稚内でのBT①

- 多くの参加者が申込の段階でサハリン(樺太)訪問(上位5項目)と「国境観光」への興味(上4項目)が決め手(動機)となっていた。
- 一般的な稚内観光では定番の食事(ウニ、タコ、力二など)や買い物(海産物の土産など)は、今回は、あまり決め手にはならなかった。

以上から、これまでの一般的な観光とは異なるBTに対するニーズがあると考えられる。

稚内でのBT②

- 満足度は80%で、項目としては開基百年記念塔(北方記念館)での斎藤学芸員による解説(第1位)、稚内市役所の中川さんが添乗して行った解説(第6位)の評価は概ね高く、これが稚内の歴史(第2位)や観光施設を魅力を高めた。
- 反対に「宗谷岬などでも解説がほしかった」。
- BTではスタディツアーリー的な要素が重要！

サハリンでのBT①

- 州立博物館では北大スラ研の井潤さんの解説(第1位)が行われ、これも好評で博物館の展示(第2位)の魅力を高めたと思われる。同様にプリゴノドノエ(第4位)やサハリンと日本・稚内の歴史的つながり(第6位)にも良い効果を与えたと考えられる。
- 入国審査と通関には時間がかかり、通常これが不満の原因となるが、「おかげで外国に来たことを実感できた」との意見もあった。

サハリンでのBT②

- 「道を聞いた時に身振り手振りでなんとかコミュニケーションをとることができた。現地の人と接することは大切だと思う。」
- 「ロシア語表記しかなく行動に不安があった。トイレが少なすぎる。食事は美味しかった。」
- 「稚内・サハリン観光にはいろいろな可能性があると思います。その中に、是非、現地のロシア人との交流の時間を作ってほしいと思います。」

などの感想・意見もあった。

今後の課題①

- 多様なニーズに合わせたテーマを設定し、複数のコースを用意できるか（集客できるか）。
- ボーダーに関するテーマを説明できるガイド集団を養成できるか（地元の大学との協働）。
- 地元の人たちとの交流の場を設定できるか（地元の祭りなどイベントへの参加など）。
- 人の流れだけでなく、地元にお金が落ち、雇用が生まれ、地域の活力の源になるような観光の仕組みづくり。
- **日口双方向の観光交流へ発展させたい！**

今後の課題②

- 他のボーダーツーリズム（国境観光）との連携（広域観光連携）。単独ではインパクトやPR力が不足する地域がボーダーツーリズム（国境観光）という統一的なイメージで連携する。
- 「人の流れ」から「モノの流れ」へ拡大・発展。定期航路を活用して、北海道とサハリンとの人の流れをつくり、それをモノやその他の流れにつなげていくことが重要！

今後の取り組み

- 境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)
- NPO法人国境地域研究センター(JCBS)
- ボーダーツーリズム推進協議会(JBTA)

多くの自治体が観光に取り組む時代に、ボーダー地域の自治体が単独でできることには限界がある。このようなネットワークの中で、各自治体の関係者や研究者、専門家、旅行業者が連携して競争力と収益力のあるボーダーツーリズムを実現したいと考えている。

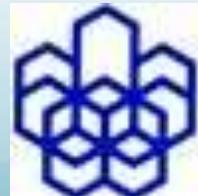
BTのもう一つの意義(まとめ)

- ボーダーツーリズムは、ボーダー地域の振興が目的であるが、大きな経済交流の流れを作るために、地域の信頼関係が不可欠である。
- ボーダーツーリズムでは、どうしても負の歴史(和人のアイヌに対する搾取、日本による植民地支配、満州・樺太の引揚者の被害、元島民の苦労など)に触れる機会が多い(一種のダークツーリズム)。
- しかし、そうした負の歴史と真摯に向き合うことが、北東アジアの新しくて明るい関係を構築するためには重要だと考えている。

ありがとうございました。

ご意見・ご質問は、いつでも takada@hiecc.or.jp まで！

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC(ハイエック) 道庁別館12階です。



フェイスブックページ



公益社団法人
北海道国際交流・
協力総合センター
(ハイエック)